

告白する主体、情動する身体

ポスト歴史主義小説としてのウィリアム・スタイロン *The Confessions of Nat Turner*

阿部幸大

0. スタイロン、ポスト歴史主義、情動理論

ウィリアム・スタイロン (William Styron) が 1967 年に上梓した問題作 *The Confessions of Nat Turner* は、1831 年に起こった黒人奴隷ナット・ターナーによる空前絶後の反乱という史実の白人作家によるフィクション化であり、出版後、黒人知識人層の反感を買うこととなった。スタイロンが参照した事件当時の資料は、小説と同じタイトルをもつ 5000 語程度のパンフレット “The Confessions of Nat Turner” とごくわずかな新聞記事のみであったというが¹、そこから数百ページに膨らんだ小説の *Nat Turner* には、おのずから、勝手な想像、恣意的な解釈、種々の歪曲などが含まれる。それを読んだ黒人たちは、「われわれの」ナットが不当に奪われ、汚されたと感じ、憤ったのであった²。

スタイロンに対する批判は、史実との乖離からナットの用いる言葉づかいまで多岐にわたっているが、なかでも、白人女性のレイプ願望を黒人奴隷のナットに抱かせていることについては多くの論者が触れている。この場面はあとで具体的に検討したいのだが、そうしたスタイロンの一連の処理が “guilty of projecting on to Nat Turner many of the classical white stereotypical notions about black people” であり、“perpetuating the racist myths of [the] white society” (Poussaint 18) に加担しているという批判には、たしかに同意せざるをえないようにひとまずは思われる。だがたほうで、出版から半世紀を経た現在、こんにちの歴史主義の議論をふまえて振りかえるとき、この小説をわれわれは別の興味深い問題を提起する作品として再読することが可能であるようにも思われるのだ。

Walter Benn Michaels は、*The Shape of the Signifier* (2004) において、ポスト構造主義の影響にとまなう歴史記述ヒストリオグラフィのありかたの根本的な変化について論じている。いわく、ポスト構造主義以後、歴史というものを十全に表象することなどそもそも不可能であるという前提が共有されるようになるが、そのとき、歴史記述が担う役割は、正しい歴史を知らしめることではなく（それは記述できないのだから）、読者に過去を追体験させることへシフトする。Michaels はこれを knowledge に対する experience の優越であると整理し、次のように述べる。

In fact, from this perspective and with respect at least to certain events, knowing about the past instead of experiencing it may come to look not like an impossibility but like an easy way out, a way of trying to avoid the reality of slavery or the Holocaust, and we thus see the emergence of a certain hostility to the idea that the Holocaust is the sort of thing that can be known. (141)

つまり、歴史を正しく知り理解しようとする態度がむしろ非倫理的とみなされるという、奇妙なねじれが生じるわけだ。奴隷制やホロコーストといった極度にトラウマティックな史実についてはとくにそうである。そのとき誠実なヒストリオグラフィは、逆説的に、表象と理解の拒否あるいは失敗という、まさしくトラウマ的な心性の追体験によって達成されることになる。この逆説がポスト歴史主義の要諦だ。言語が表象機能を喪失し、たんなる物質的なシニフィアンと化す瞬間を重視するド・マン的な態度は、この拒否と失敗の倫理の徹底として捉えることができる。このように、ポスト歴史主義、脱構築、トラウマ理論は、それぞれ互いに親和的である。

*Nat Turner*に戻って、この小説に向けられた批判を、上述の歴史主義／ポスト歴史主義という区別を用いて捉えなおしてみよう。まず、スタイロンの描くナットが差別的である、つまり政治的に間違った表象であるという批判は、より正しいナット表象の可能性を想定した、歴史主義者の意見であるということになるはずだ。それに対して、ポスト歴史主義者の *Nat Turner* 批判は次のようになるだろう——スタイロン氏はナットの表象と理解に、軽々しく成功した気になってしまっている、と。

付言しておけば、1980年代から本格化したこのようなポスト歴史主義の考え方をういて1967年の *Nat Turner* を考察するアナクロニズムが有効だという立場を本稿がとるのは、スタイロンという作家の関心が、ある意味では一貫してポスト歴史主義的なそれであったと考えられるためである。1951年に *Lie Down in Darkness* でデビューしたスタイロンは当時26歳であったが、彼はそこですでに、不倫する中年男性と、発狂して自殺するその娘の心理描写を中心に据えており、自らの経験を元にして語るという方法からは遠いところで小説家としてのキャリアを開始しているし、67年の *Nat Turner* で激しい批判にさらされたにもかかわらず、79年の *Sophie's Choice* では——懲りずにと言うべきか——、あまつさえホロコーストを題材に選んでいる。つまり、スタイロンという小説家の方法は、自らが当事者となりえない、しかも奴隷制やホロコーストといった尋常の想像力を逸したトラウマティックな事象に、部外者としてあえて踏みこむ蛮勇を基本的なスタンスとしていたと考えることができるように思われるのだ。Michaelsの整理をふまえた地点からふりかえってみれば、こうしたスタイロンの態度は、表象不可能性を前提としながら歴史小説をものすポスト歴史主義者の態度と共通していることに気付かされるだろうし、なかでも *Nat Turner* は、次に述べるように、そうしたポスト歴史主義的態度からさらなる一步を踏みだした作品として読むことさえ可

能であるように思われるのだ。

そこで参照してみたいのが、Silvan Tomkins をその先駆とする、いわゆる情動理論 (Affect Theory) の考え方である。なぜなら、この理論はまさしくトラウマ理論への批判的応答として発展してきたものでもあるからだ。そのあたりの事情を整理した文章を引用すれば――

「情動理論」は、シヨシヤナ・フェルマンやキャシー・カールスらによる「トラウマ理論」への批判的応答として 2000 年代中盤以降に英語圏にて発展した理論的運動と言える。両分野の接点で研究を続けるカナダの研究者マリア・セティニッチによれば、トラウマ理論は、テキストにおける外傷的経験の反復を探求するが、しかし外傷の特異性を抑圧された過去に措定してしまう点で、人種の本質主義などと親和性を維持してしまう。トラウマの回帰をフーコーが批判した「抑圧仮説」の視点から見る傾向が残存するため、すでに主体化＝従属化された個人や集団の表象を補強してしまう点に問題がある。こうしてカテゴリー化され、「傷の文化」としての需要を促進されることで、トラウマ理論は実のところ外傷と表象体系との間の齟齬を解消してしまうリスクを示してしまう。

情動理論は、こうしたトラウマ理論を批判的に乗り越えることに端を発し、個人的な経験や国民国家的なナラティブ、文化として解釈し認識しえない感覚を、現象あるいは効果として分析することを目的としているのである。(笠根 320)³

いささか長い引用になったが、つまり、トラウマ理論の中心にある表象不可能な核という構成は、本質主義との共犯関係に陥りかねない。そこで、言語化不可能ではありながら、本質主義には加担しないような何か、解釈されえないけれども現象／効果としてたしかにそこにある何か、その領域を身体と情動に求め、それを見つめようというのが、情動理論の基本的なアイデアである⁴。

はたせるかな、*Nat Turner* という小説においては、言語化不可能性と身体／情動とが分かちがたく結びつけられているように思われる。ごく単純に言えば、ナットが「告白」に失敗する瞬間に、身体と情動が前景化されるという構造がこの小説では反復されているのだ (Shoshana Felman もまた「告白」の問題点はそれがあまりに読めすぎてしまうことだと述べている [151])。われわれはナットの告白がつまり瞬間、この数百ページにわたって展開される饒舌で理知的で自意識的で小説的なナラティブ⁵の陥没点に着目することで、*Nat Turner* の語りがパフォーマンスに提示する言説化の可能性と不可能性のあいだの揺れを見てゆこうと思う。こうした言説化の臨界点は、上述の「ド・マン的瞬間」にたしかに近いものなのだが、しかし、本作品においてそれらは神秘化されるのではなく、すぐれて情動的かつ身体的な瞬間として具体的に提出されている。あるいは、われわれはそれをかろうじて読むことができる、と言ってもいい。そうした瞬間が重要なのは、なによりも、ナットの内面を想像し言説化するという蛮勇に対

するスタイロンの自己批評の瞬間と、それらが一致するはずだからである。

以下では、まず告白と主体の関係を述べたフーコーの議論を参照しつつ、ナットが言語と同時に信仰を獲得することに注目し、彼がキリスト教道徳を内面化するとともに身体を抑圧することを見る。そこではリベラリズム的な主体概念によってナットを理解しようとする態度もまた問題となるだろう。つづいて、言説化の臨界点において身体と情動が回帰する場面を読み、白人への共感こそが白人への真の憎悪を生むというナットの倒錯の意味を考える。そこでわれわれは共感可能性というテーマを見出し、ポスト歴史主義の時代を経たこんにちにおいて *Nat Turner* というテキストを読みかえすことの意義を確認することになるだろう。

1. 告白する主体

The Confessions of Nat Turner は、トマス・グレイが口述筆記し再構成した実在の文書と同一のタイトルであるとはいえ、それはやはりスタイロンによってあらためて告白の書物として想像されている。告白という言説の形式が主体を生みだすというミシェル・フーコーのテーゼはあまりにも有名だが、この一人称小説はまさしく、ナットという人物を、みずからの人生を物語化し、事件に至る動機や経緯を説明することができる、すぐれた告白の主体として想定することで成立しているテキストである。そして告白を可能にするものはとりもなおさず言語なのであり、彼が言語を習得する教材は主に聖書であるため、ナットが黒人を救済する手段を“the power of the Word” (219) と呼ぶとき、彼において言語と信仰と抵抗は三位一体となっている。この三位一体はナットに抵抗と告白を可能にさせるものであると同時に、彼を身体と情動から疎外するものでもある。本節では前者について見てゆこう。

Sean McCann は、冷戦初期のアメリカにおいて *The Catcher in the Rye* (1951) や *Lolita* (1955) といった狂人や犯罪者による一人称小説が複数あらわれた事実に着目している。リベラリズムのプロパガンダが盛んであったこの時代、多様な自由の希求と実現というかたちで個人主義を肯定する物語が多く書かれることになったというのだ。そしてこれらは狂人や犯罪者といった、いわゆる「信用できない語り手」によって語られるため、そこでは内容の真偽ではなく、読者を感情的に説得すること、共感の達成が目指されることになる⁶。

これらと *Nat Turner* を比べてみると、さまざまな共通点が浮き彫りになる。これもやはり「犯罪者」による一人称語りという形式を持っており、彼は言語を獲得し個人主義にめざめた、自由を求める奴隷である。だが、事態はもう少し複雑である。まずナットの反乱は史実であるから、スタイロンが肉付けしてそれを小説化するとき、われわれはナットによる読者の説得の次元よりも、スタイロンによるナット理解のほうをより強く意識せざるをえない（サリンジャーによるホールデン理解がこのようなかたちでは問題になりにくいことと比較されたい）。じじつ、スタイロンは小説冒頭に“Author’s

Note”を付し、そこで“in those areas where there is little knowledge in regard to Nat, his early life, and the motivations for the revolt . . . I have allowed myself the utmost freedom of imagination in reconstructing events” (xi)と断っている。このとき「語り手の信用できなさ」という McCann が抽出した共通点は、*Nat Turner* の場合、その大部分がスタイロンに転嫁されることになるだろう。すなわちこの小説においては、ナットによる自伝的な語りの欲望と、ナットの内面を想像し言説化することによって彼の“motivations”を理解し納得するというスタイロンの欲望とが、一体化しているのである。

一人称小説としての本作品の様相を複雑化しているもうひとつのファクターは、むしろ、人種である。すでに述べたように、小説が描く限りにおいて、ナットに抵抗の想像を可能にさせた条件は、言語の獲得にすくなくとも部分的には求めることができる。そしてそれは彼の主体性の確立と信仰の内面化と不可分なのだった。ここで考えなければならないのは、この整理がまず、リベラリズムが規定する主体概念、すなわち、自らの自由意志にしたがって物事を選択でき、それゆえ動機を説明＝告白することができる個人というモデルによってナットを理解しようとする態度だということである。そのときわれわれが受け取るのは、お人好しのサミュエル——ナットにとっての“a father figure” (Ratner 110) ——の作中での語彙を借りれば、“education”と“enlightenment”によってナットはより「人間」に近付けるのだという啓蒙主義的な説明であるだろう (156; 122)。こうした説明は、スタイロンによる創作の大部分がナットの告白である以上、かなりの程度まで正しいと考えざるをえない。

こうした整理に同意するとき、われわれはナットをリベラルな主体と見做すことになるわけなのだが、しかし、きわめて素朴な次元に戻って、次のように問いなおしてみるべきである——奴隷のナットが自由であったはずなどないではないか。ナットの告白の失調の瞬間に身体と情動の前景化を確認しようとする本稿は、そこにリベラルな主体概念におさまらない何かを同時に目撃することになるだろう。またここで、先のメタフィクショナルな構造を想起しておくべきである。つまり、ナットがみずからの内面の言語化に失敗する瞬間は、スタイロンがリベラルな主体概念にもとづく理解によってナットを全面的に覆ってしまうことにブレーキをかける地点と重なるはずなのだ。以下で具体的に見てゆこう。

2. 情動する身体

Nat Turner において、身体は性ととともに基本的に抑圧されている。それはまずなによりも、作中のある牧師が言うように、“Your bodies, you know, are not your own . . . but your precious soul are still your own” (96) という黒人奴隷の強いられた物質的条件の反映である。あるいは、第1部と第3部それぞれの冒頭において反復される、河口にむかって流される船に仰向けに横たわっているイメージもまた身体の浮遊感

と受動性とを象徴的に提示していると考えられるし、さらに言えば、ナットは言語の獲得と同時にキリスト教道徳を内面化するわけだが、魂の救済を謳い性欲の抑制を説くその教義は、無自覚に“obscene”な言葉を用いる奴隷のウィリスに関して、ナットをして“bring him out of ignorance and superstition and into the truth of Christian belief” (197) という願望を抱かしめる。また、前節の文脈をふまえて告白が主体を生産すると述べたときフーコーが特権化したのがやはり性であったことを思い出しておけば、彼はフーコーの批判するリベラルな主体そのものとして描かれていると言ってしまってもいい。ナットにおいては精神と言語が身体と性に先行しているのである。

身体と性を抑圧する精神と言語——そして抑圧されたものの回帰——という単純な図式をまずは得たところで、この小説において興味深いのは、どうやら性と身体がその回帰において何らかの剰余を伴うらしいということである。ナットは牢獄に囚われた小説の末尾において、一連の事件について“I feel no remorse” (381) とグレイに繰り返すものの、内心では“I would have done it all again. I would have destroyed them all. Yet I would have spared one” (414) と考えている（したがって彼のグレイへの返答は政治的なものである）。この“one”は彼が直接手を下す唯一の人物であるマーガレットを指しているが、まずは小説末尾の第4部において彼があきらかに彼女に対する性的欲望を吐露している場面を引用しておく。

I tremble and I search for her face in my mind, seek her young body, yearning for her suddenly with a rage that racks me with a craving beyond pain; with tender stroking motions I pour out my love within her; pulsing flood; she arches against me, cries out, and the twain—black and white—are one. (412)

さきにスタイロンの批判者にひとまず同意せざるをえないと述べたのは、とくにこのパッセージを念頭に置いてのことである。これまでの議論をふまえれば、スタイロンはここでナットに性的欲望の告白に成功させ、彼をリベラルな主体として完成させているようにさえ見えるだろう。だが本稿はそうした議論に一定の正当性をみとめつつも、むしろ告白に失敗する場面にこだわってみたいのだ。そもそもこの性的欲望の告白は、小説全体にたいしてごくわずかな分量しか占めていない、数ページの第4部におけるナットの空想にすぎないのである。われわれはこの告白の「成功」の箇所を抜き出して拡大することでこの小説のイデオロギーを代表させるよりは、むしろ小説全体に散りばめられた告白の失敗の瞬間を精読することを選びたい。

さて、犯行の場面を除けばマーガレットに対面する最後の機会である教会へ向かう馬車でのやりとりを、ナットはくりかえし思い出す。それらの回想はどれもきわめて重要である。最初に見ておきたいのは、それが第1部において最初にあらわれるときの、彼の混乱した回想のナラティブである——

Suddenly, my heart still pounding uproariously, I am filled with a bitter, reasonless hatred for this innocent and sweet and quivering young girl, and the long hot desire to reach out with one arm and snap that white, slender, throbbing young neck is almost uncontrollable. Yet—strange, I am aware of it—it is not hatred; it is something else. But what? What? I cannot place the emotion. It is closer to jealousy, but it is not even that. And why I should feel such an angry turmoil over this gentle creature baffles me, for save for my one-time master Samuel Turner, and perhaps Jeremiah Cobb, she is the only white person with whom I have experienced even one moment of a warm and mysterious and mutual confluence of sympathy. Then all at once I realize that from just that sympathy, irresistible on my part, and unwanted—a disturbance to the great plans which this spring are gathering together into a fatal shape and architecture—arises my sudden rage and confusion. (91)

ここで彼が言語化できていない“emotion”の正体は、上の引用からだけでも、ひとまず性欲なのではないかと推測しうるだろう。さしあたりその前提で話をすすめれば、ポイントは、性欲が言語化を逃れることそれ自体ではない。性欲を言語化しようとして失敗するとき、かわりに何が具体的に書かれているかだ。彼は“the long hot desire to reach out with one arm . . .”というレイプを予感させるモーションを、“neck”を“snap”するという単なる（必ずしも性的でない）暴力の欲望へと（無意識的に）短絡させ、そこで（われながら）何かがおかしいということに気付く。そのとき彼が見出している感情は、“hatred”でありながら“hatred”でないなにかであり、またその両義的な激しい情動を喚起する条件として“sympathy”があるようだと思はれる。

この時点でわれわれは、言語化の失敗の瞬間における情動と身体の前景化という読解可能性に出会っている。そしてそこで「回帰」しているものが、なにか複雑な組成を持っているらしいことも同時に確認しておきたい。共感を抱いたことのある白人に対してのみ激的な憎悪を抱きうるという倒錯、また性欲と暴力との短絡、以下ではこうした混乱の意味を考えてゆくことになるだろう。

つづけて、いま読んだ引用の内容を実質的に反復していると思われる別の箇所を読んでみる。第3部の冒頭において“real hatred”の条件は“intimacy”の経験であるというテーゼ——したがってこのintimacyは上記のsympathyの言い換えであり、real hatredは彼が言語化できない両義的な激情である——が提出されたあと、その例証として語られるエピソードに、アーノルドという自由黒人が出てくる。彼は北部から訪れた不案内な白人女性の質問を聞き取れず、かろうじてキャッチできた“Major Ridley”という固有名詞をもとに、彼女の質問内容を誤って推測する。つづいて彼は“Majah

Riblees he lib dar, ap yonnah road ap yonnah” という訛りのきつい黒人英語で道案内しようとするが、それをまったく聞き取ることのできない婦人は、その場で泣き出してしまふ。この場面の一部始終を目撃していたナットは、そのとき “I was seized by a hot convulsive emotion that I had never known so powerfully before” であったと述べ、その理由を、“For what I had seen on this white woman’s face was pity” と説明する。だが彼はこの女性のコンディセンディングな態度に憤るわけではない⁷。ナットは “it was, you see, pity alone that did this, not the woman herself apart from pity” と強調したうえで、その経験は “as if . . . she had invited me to glimpse herself naked in the flesh” であったと、奇妙な感覚を述べる。そしてこの “pity” もやはり先の “sympathy” とほぼ同義であるらしいことが、ナットの次のような総括で判明する——“it was not a white person’s abuse or scorn or even indifference which could ignite in me this murderous hatred but his pity, maybe even his tenderest moment of charity” (257-60)。

以上ふたつの類似した場面をあわせて読みくらべると、後者の場面においては、さきにひとまず性欲であると推測しておいたナット本人が言語化できない情動が、“to fornicate with a white woman” (257) と明確に性的欲望として記述されていることが注目される。だがさきに、sympathy/intimacy/pity を条件として発動する「hatred でありながら hatred でないもの」と名指されていた混乱した激情の正体が、じつは性欲——*Nat Turner* の政治的な正しくなさの中核——だったということがここで明かされていると解釈するだけで、はたして十分なのだろうか？ そうした理解は、彼の “it was . . . pity alone that did this” という注記、あるいは “a white person’s” ならびに “his” という（女性形でない）所有形容詞を用いていることを見逃しているのではないか？ さらに、“as if . . . she had invited me to glimpse herself naked in the flesh” という奇妙な感覚——これは本当にたんなる性欲なのだろうか？

この問いを考えるには、彼が男性の主人にたいしても同型のアンビバレンスを示すことを見ないわけにゆかない。そこでまずは、ナットが白人と目を合わせようとしないという事実注目したい（これは黒人奴隷一般に当てはまる傾向ではあるだろう）。彼がみずからそのことを強調しはじめるのは、マーガレットと教会に向かっている場面であり (361)、その直後につづく、いざ主人を殺そうとする場面においてそのことの意味は決定的となる——

I realized with wonder that this was the first moment in all the years I had been near him that I had ever looked directly into his eyes. I had heard his voice, known his presence like that of close kin; my eyes had a thousand times glanced off his mouth and cheek and chin but not once encountered his own. It was my fault alone, my primal fear but—no matter. . . . and I felt that I knew him at last. . . . It was as if by

encountering those eyes I had found the torn and long-missing fragment of a portrait of this far-off abstract being who possessed my body; his face was complete now and I had a final glimpse of what he truly might be. Whatever else he was, he was a man.

All right, man, I thought. (376, ellipses mine)

ナットにとって白人の身体を全体性のもとに眺めることは脅威であり、白人は“far-off abstract being”の状態にとどまっているべきであったという。なぜか。これは第一に、常識によって理解することができる。つまり、黒人奴隷にとっては白人と目を合わせることを含め、白人の身体を想像してしまうことが節度を越えたことであるためだ——それは単なる無礼にとどまらず、究極的には白人女性のレイプ願望と解釈される可能性のある行為なのであり、すなわち白人にリンチの口実を与えかねない行為なのである。

だがその境界を踏み越えてしまったナットの身に生じる変化は、白人女性のレイプ願望の噴出であるところか、男女を問わず白人の身体を傷つけることができなくなってしまうという、ほとんど正反対の事態である。彼は、これまで抽象的かつ断片的な存在でありつづけていた白人の正体が、生身の身体を持った単なる“man”にすぎないという事実を発見して、いたく驚く。そのとき彼が獲得しているのは、白人という他者が身体を有しているという事実、そしてそれが suffer する可能性への想像力であり、それが結果として暴力の行使を不可能にするのである。

こう読んでみると、彼が白人の身体への共感可能性を抑圧してきたことの必然性が見えてくる。彼にとって sympathy/intimacy/pity が「hatred でありかつ hatred でないなものか」を喚起するトリガーとなるのは、共感というものが憎悪を、反乱を不可能にするがゆえに、彼が共感そのものを憎悪せねばならないためなのである。これが「hatred でありながら hatred でない」という両義性の正体だ。憐れみを示す女性が“glimpse herself naked in the flesh” することを使喚するように思え、そのことに彼が“real hated” を覚えるという倒錯も、いまや次のように理解することができる。すなわち、共感可能性が身体を可視化することの必然を彼は察知しているのであり、それゆえ彼はよくわからないまま憤らねばならないのであり、みずからの情動を暴力へと短絡させなければならないのだ。

ナットが共感可能性と白人の身体への想像力を抑圧しているというのは、むしろ彼が断罪されるべき事態なのではなく、それは黒人奴隷が強いられている認識であるにすぎない。彼らは白人の目を直視しないこと＝白人の身体を想像しないことを、ある種の節度として構造的に内面化させられている。この不自由が彼の倒錯と告白不可能性に結果しているという事態こそが、彼におけるリベラルな主体概念からの剰余だ。そして身体と情動に注目してきた本稿の文脈においてもっとも興味深いのは、彼がどのようにしてその強制された条件を突破するか、突破してしまうかである。最後にその点を検討しよう。

3. 他者の苦痛へのまなざし

彼が犯行におよぶ（そして誰ひとり首尾よく殺すことができない）直前に置かれたマーガレットと馬車に乗っている場面で、白人と目を合わせられないことをナットが強調しはじめるということはすでに述べた。そのシークエンスにおいて見逃せないのは、黒人奴隷に対する差別意識がもっとも希薄なキャラクターであるマーガレット⁸が、道端で苦しんでいるカメに対する共感を表明するエピソードである。

馬車か何かに轢かれたらしく甲羅が割れてなお生きながらえているカメを見て、マーガレットは“it must suffer so”と繰り返し、しまいには具合が悪くなってしまう。それに対してナットは、“Turtle doesn’t feel anything. He’s pretty dumb. They’s an old nigger sayin’ about animals that goes, ‘They that doesn’t holler doesn’t hurt’”と言って宥め、木の棒でカメの頭を殴って殺してやる（359）。グレイは小説冒頭で所有権の概念を説明するために、まず犬を例に用いようとし、ただちに思い直して荷馬車を取り上げ、それらとのアナロジーで所有物としての黒人のステータスを述べることで、白人にとっての奴隷／動物／モノのグラデーショナルな類比性という主題を導入しているが（21）、ここでナットが目撃しているのは、人種どころか種の壁さえも平然と乗り越えて他者の苦痛を想像し憐れむことのできる白人女性の共感能力である。この直後にナットは一瞬だけマーガレットと目を合わせて動揺し、それを一種の助走として、その日の夜に、先に引用した主人の身体性の視認へと至る。彼がそこで白人の身体を直視できてしまい、そして殺せなくなってしまうという結末の直前にマーガレットの他者への共感能力を描いたエピソードが配されているのは、偶然ではありえない。

上記のマーガレットを宥める台詞において、ナットの動物に対する態度が、白人の黒人奴隷に対する態度と相似形をなしていることは明らかである。彼は白人／黒人／動物というヒエラルキーを強く内面化しており、これら三項は互いに共感など不可能だし、またその必要もないと考えている。これは、黒人奴隷の苦痛を白人が想像しようとしないうこと、ならびに黒人に白人の身体を想像させないようにすること、これら白人による抑圧によって黒人が強制的に獲得させられた認識なのであった。だがマーガレットの憐れみと共感、この黒人差別を反転し非難しているのではない。この場面のポイントは、人種の垣根を超えるといった進歩的な思想ではなく、人であれ動物であれ痛みを苦しむものを見るのは端的につらい、という根源的なリアクションのもつ普遍性なのである。たしかに、マーガレットの共感能力は白人の特権だと考えることもできる。しかし、彼女のいわばあっけらかんとした脱（人）種的なその能力の発露が、白／黒のヒエラルキーを強く内面化させられたナットにとって脱構築的な効果を持ちえていることも、また確かなのだ。

かくして彼には白人の殺戮が——他者の身体に痛みを与えることが——不可能となる。ただし、彼はマーガレットだけは殺すことに成功するのだった。しかし、彼がか

ろうじてそうできたのは、マーガレットがか弱い少女だからではなく、やむにやまれぬ状況だったから (Genovese 203) でもない。彼が彼女を殺すことができたのは、震える手で致命傷に至らない傷を負わせたあと——苦しんでいるカメを殺してやる場面を反復するかたちで⁹——、“Oh Nat please kill me I hurt so” (402) と懇願する彼女の痛みを¹⁰終結させるためという迂回を経たからである。そうして彼は “I would have spared one” という悔恨の念を抱えて、処刑台に立つのだ。

*

Susan Sontag は *Reading the Pain of Others* において、他者の苦痛というものをわれわれは最終的には想像できないのだと結論した (125)。むろんそれはひとつの倫理的な態度でありうる。だがトラウマ理論と人種の本質主義の共犯関係という問題意識をもち、ポスト歴史主義が乗り越えられようとしているこの時代に本書を読んできた本稿は、本作品に別の倫理の可能性を見たいと思う。

ある総括によれば、スタイロンの創作態度は、“It was arrogant because it assumed that the differences that separated him from slavery might be bridged by his literary prowess” (Tell 116) という点において反感を招いた。だが *Nat Turner* でスタイロンがとった真の戦略は、黒と白のコントラストを——そして憎悪を——より際立たせることではなく、しかしもちろんその差異を解消してしまうことでもなく、なんらかの共通の基盤 (“bridge”) を模索するひとつの方途を探ろうとすることなのである、とそう本稿は結論したい。そしてその第一歩が、たとえば痛みを苦しむ他者を見るのはつらいという、マーガレットが示し、そしてナットが打たれる単純でしかしそれゆえに根源的な共感の可能性であって悪いということがあるだろうか。

The Confessions of Nat Turner は、奴隷制の経験もなく黒人でも同時代人でもない作者、つまりナットを完全に他者とみなしつつ想像するほかない作者によって書かれたがゆえにこそ、人種的他者の内面の想像という行為における自己批判のモメントを内包し、ポスト歴史主義的な方法とその乗り越えとをともに達成する作品となりえた。そしてこれは同時に、身体と情動というテーマを中心化しながら、白人がその作品において黒人を “metaphorical shortcuts” (Morrison x) に頼らずに描くことに成功した、ひとつの稀有な例でもあるのではないだろうか。

注

¹ See Casciato 565. また Henry Tragle は、当時の資料は貧しく参照に値しないとスタイロンが切り捨てていることについて、貧しいのはスタイロンの調査能力のほうであると批判している (qtd. in Tell, 106-07)。

² *Ten Black Writers Respond* の寄稿者の多くがナットを名指すさい my/our という所有形容詞を冠し、スタイロンによるナット表象の収奪性を強調している。たとえば Hamilton “Our Nat Turner and William Styron’s Creation” や Harding “You’ve Taken my Nat and Gone” など。また、Gross 170 頁、Tell 第 4 章なども参照。

³ ここで参照されているのは、Marija Cetinic, “Sympathetic Conditions: Toward a New Ontology of Trauma,” *Discourse* 32.3 (2010): 285-301。また「傷の文化」については Seltzer を参照。

⁴ 情動理論についての整理は竹内「まえがき」も参考にした。

⁵ ナットの用いる言語の過剰な文学性、ならびに、会話文における “plantation Negro dialect” との二重性にかんしては、Core 160-61 を参照。

⁶ McCann 第 3 章を参照。

⁷ Ratner はここで女性が表明する態度を “the demeaning condescension of sentimentalized pity” であると評しているが (113)、この場面の女性は自分でもわけがわからないまま、一種の麻痺状態に陥って泣き出してしまうように見える。

⁸ マーガレットのキャラクタライゼーションが過度にロマンティックであることについては批判がある。Kelvin 222-26、Pearce 42 を参照。

⁹ トマス・グレイの口述筆記によれば、ナットは “after repeated blows with a sword, I killed her by a blow on the head, with a fence rail” と証言している (Grey 107)。fence rail は木の柵で、作中のナットはマーガレットを sword で殺すので、スタイロンはこの証言をカメのエピソードに移植したのかもしれない。

引用文献

Casciato, Arthur D., James J. W. West III, eds. *Critical Essays on William Styron*. Boston: G. K. Hall, 1982.

—. “William Styron and The Southampton Insurrection.” Casciato, *Critical* 213-25.

Clerke, John Henrik, ed. *William Styron’s Nat Turner: Ten Black Writers Respond*. Boston: Beacon, 1968.

Core, George. “The Confessions of Nat Turner and the Burden of the Past.” Morris 150-67.

Felman, Shoshana, Dori Laub. *Testimony: Crises of Witnessing in Literature, Psychoanalysis, and History*. New York: Routledge, 1992.

Genovese, Eugene D. “William Styron before the People’s Court.” Casciato, *Critical* 201-12.

Grey, Thomas R. “The Confessions of Nat Turner.” Clerke 93-117.

Gross, Seymour L., Eileen Bender. “History, Politics and Literature: The Myth of Nat Turner.” Morris 168-207.

Hamilton, Charles V. “Our Nat Turner and William Styron’s Creation.” Clerke 73-78.

Harding, Vincent. “You’ve Taken My Nat and Gone.” Clerke 23-33.

Kelvin, Norman. “The Divided Self: William Styron’s Fiction from *Lie Down in Darkness* to *The Confessions of Nat Turner*.” Morris 208-26.

- McCann, Sean. *A Pinnacle of Feeling: American Literature and Presidential Government*. Princeton: Princeton UP, 2008.
- Michaels, Walter Benn. *The Shape of the Signifier*. Princeton: Princeton UP, 2004.
- Morris, Robert K, Irving Malin, eds. *The Achievement of William Styron*. Athens: U of Georgia P, 1975.
- Morrison, Toni. *Playing in the Dark: Whiteness and the Literary Imagination*. Cambridge: Harvard UP, 1992.
- Pearce, Richard. *William Styron*. Minneapolis: U of Minnesota P, 1971.
- Poussaint, Alvin F. "The Confessions of Nat Turner and the Dilemma of William Styron." Clerke 17-22.
- Ratner, Mark L. *William Styron*. Boston: Twayne, 1972.
- Seltzer, Mark. *Serial Killers: Death and Life in America's Wound Culture*. New York: Routledge, 1998.
- Sontag, Susan. *Regarding the Pain of Others*. New York: Picador, 2003.
- Styron, William. *The Confessions of Nat Turner*. London: Vintage, 2004.
- Tell, Dave. *Confessional Crises and Cultural Politics in Twentieth-Century America*. Pennsylvania: Pennsylvania State UP, 2012.
- 笠根唯「訳者ノート——『醜い感情』の翻訳にあたって」竹内・高橋、320-24頁。
- 竹内勝徳・高橋勤編『身体と情動——アフェクトで読むアメリカン・ルネサンス』彩流社、2016年。
- 竹内勝徳「まえがき」竹内・高橋、1-10頁。
- フーコー、ミシェル『性の歴史Ⅰ——知への意志』渡辺守章訳、新潮社、1986年。